

芭蕉元禄事業 奥の細道むすびの地「大垣」十六万市民俳句ポスト

平成二十九年六月度 入選句（投稿総数二千二百四十二句・一般投句数五百十三句）

特選

選者 名和 永山

掌に 掬ふ 螢火息をつぐ 不破郡垂井町 西垣 和志

ちかごろ「螢」を見なくなつたが、昔、家のすぐそばの小川の辺でよく螢狩りをした。両手でそつと螢を捕まえるのだが、掌の中で螢が光を放っている。自分の呼吸のリズムで光っているように見える。ただ、これだけのことを言うのなら「掌の螢火息をつぎにけり」でよいのだが、作者は、ふつと「一息つく」という、自身でもあり、螢でもあることを暗示した表現をしている。それは、「螢火／息をつぐ」と螢火であえて「切れ」を生かしているのである。この「息をつぐ」その間に「昔のおもかげ」が頭をよぎらせるという、読者に想像をゆだねた点がよい。

白靴に替えて歩幅の広くなり 北海道旭川市 葛西 ともこ

季語は「白靴」で夏。衣替えすませて、靴も白くして、何とも言えないまでも、気持ちまで軽くなっている。そんな様子を「歩幅が広くなった」という、行動の変化に置きかえている点が良い。また、全体のリズムも整っている。「くくくくくくく」無理のない言葉で、リズムをよくしているといえる。

経読みが寝言となりて初遍路 安八郡安八町 渡邊 千代美

季語は「遍路」で春。「遍路」とは、祈願の目的で、四国の弘法大師空海の霊場八十八箇所を巡り歩くことを一般には言います。しかし、現在は宗派による「霊場」巡りとか観光ツアーもあります。作者は初遍路に出かけ、行く先々で経が唱えられます。何回も聞くその経が頭に残るほど遍路を楽しむ様子が「経読みが寝言にまでなつた」ことでよく解ります。俳句はその昔、「俳諧」と呼ばれていました。その内容の一つに「滑稽さ」がありますが、おもしろさをもつた俳句ですね。

秀逸

たつぷりと風受く白帆夏めきぬ	養老郡養老町	田中	紫香
万緑を天蓋にして塚眠る	養老郡養老町	田中	秀子
五月雨や音を洩らさぬ砂時計	大垣市	棚橋	みさを
道狭め咲く紫陽花や傘傾ぐ	大垣市	福田	絹子
軸を押す男衆の背や若葉風	大垣市	吉田	てるみ
緑雨来る文字くつきりと寄進札	大垣市	野村	多佳子
万緑や絵の具にはない色と艶	岐阜市	後藤	衣錦
おはよりの声も弾むや衣更	大垣市	新町	恵子
夏めくや床屋の鋏軽やかに	神奈川県横浜市	龍野	ひろし
作業着のままの夜伽や五月闇	岐阜市	堀江	美州

入選

経を誦む僧の背中に団扇風
白雲も月も浮かべし夜の代田
冠木門朽ちてざわめく竹の秋
母誘い歩巾合わせて春日傘
霾天や影絵となりて伊吹山
天と地がひとつに染まるさくら道
旅に来て初夏の日まぶし記念館
ユネスコの山車巡行や城下町
滝流る虹と万緑色比べ
たけのこを斜めに切りし膳せまし

安八郡神戸町 早津 郁男
愛知県額田郡 平松 京師
福井県敦賀市 山田 美千代
大垣市 赤塚 つねみ
大垣市 田口 貞善
大垣市 山田 佐代子
滋賀県長浜市 藤居 通夫
大垣市 澤井 国造
大垣市 名和 昭郎
大垣市 藤岡 啓子

入選

登校の揃ふ学帽道若葉
足の指みななのびのびと薄暑かな
雑踏に捨てし未練や草いきれ
書いて消す日誌の誤字や春惜む
夏の蝶日を裏返しうらがへし
四つ辻にさす川風や山車軋む
あじさいや昨日と違ふ顔をして
捨てきれぬ夫の衣のあり更衣
黒髪が走る田園麦の秋
原稿の余白埋まらず明易し

不破郡垂井町 西垣 和志
岐阜市 島 めぐみ
羽島郡笠松町 易田 喜芳子
大垣市 鶴田 信子
大垣市 佐藤 すみ子
岐阜市 木田 由美
大垣市 吉田 てるみ
不破郡垂井町 竹嶋 富美子
長野県下伊那郡 長沼 まさし
兵庫県尼崎市 佐々木 啓川

選者吟

水馬川底知らぬまま生くる

永山